

「時代の風」 山極寿一 京都大学長

今回の時代の風は、「大学の街と思索の舞台」がテーマだ。引きこまれるように読みすすんだ。

「ドイツのハイデルベルクは大学の街であり、『哲学の道』がある。昔から多くの研究者がこの道を歩いて思索を練ったらしい。

私はここに、京都や京都大学との共通点があると強く感じた。京都大学の近くには『哲学の道』がある。この道を少し上がれば法然院があり、京都の街を遠望できる。木々に囲まれた小道を歩いて自然との対話を楽しみ、人々の日常を遠望する。そこがハイデルベルクと京都の『哲学の道』に共通する特徴だと思う。

人間にとって心地よく思索にふけるためには、自然の中を一人で歩くのが一番だ。目に映る自然のたたずまいや虫や鳥の声は、一人で思索を練ることを可能にさせてくれながら、孤独を感じさせない。都市の街並みを遠望できる立ち位置は、人間の営みを少し離れて眺めようとする境地をもたらす。歩くたびに聞こえてくる自然の音や声は、虫や鳥になって世界を見つめる感性を開いてくれる。

歩く速度も考えるのにちょうどいい。人間は約700万年前にチンパンジーとの共通祖先と分かれてから、最初に直立二足歩行という人間独自の特徴を身につけた。これは、時速4キロぐらいの速度で長い距離を歩くときにエネルギー効率がいい。つまり、人間は歩きながら、歩くことに意識を集中させずに思考を解き放つことができるのだ。走っていたり、自転車や車を運転したりしているときに、自由に考えをめぐらすことはできない。新しい考えは、自然に囲まれた小道を一人で歩いているときに突然宿るのである。

京都大学の学長になってほぼ半年が過ぎた。その間、いろいろな人の意見を聞いて、私は京都大学のもっとも大きな財産は京都そのものにあると悟った。

山際学長らしい機知に富んだ「時代の風」である。このレポートでも何回か取りあげたが、哲学の道や法然院はお気に入りのスポットであり、京都と京大に想いを馳せた。

(2015年3月5日)

